

# 下町娘

長谷川時雨

青空文庫



江戸の女を語るには、その階級から語らなければならない。

武家と町人——それはその時代の何處にもカツキリとされた區別であるが、江戸にはもひとつの別階級がある、職人である。

下町娘の總稱は、町人、職人を一つにまとめて、日本橋、京橋、芝、神田、下谷、淺草、本所、深川に住んでゐた、下町つ子の娘をさしてさう呼ぶ。だが、その下町娘の中に二種類があるといはなければならない。富裕な町人の娘の階級と、さうでない層の娘。私はあの方のをこそ下町娘であると思ふ。いま、歌舞伎劇などで、下町娘の代表になつてゐる扮装おつくりは、白子屋お熊や、八百屋お七であるが、あれは丁度その眞中をいつてゐる好みだといへる。

黄八丈に黒縹子の襟、ひか緋鹿の子の半襟、絞りばなしの鹿の子の帯。ゆひわた結綿島田に朱ぬりの差櫛、花簪。

出来れば、下町生れの娘はみんな、そのおつくりを好んだに違ひない。また、似よつたおつくりもしたかつたであらう。だが、江戸時代でも、明治のはじめでもさうであつたであらうが、あたしの知つてゐる下町の娘はもつと働いたから、あんなゾベラくとした姿をしてゐなかつた。

一體にきやん侠なとりなり——きやん侠とはフラツパーとはいささかちがふ。俠氣をもつ、ハツキリとしてゐる。ものいひも、ものごしも——それが轉じて、おきやんな（お轉婆、もしくはあばずれ）鼻つぱりばかりの腹のないものにもなつたが、由來は、生々した、清新

な、瀟洒と清楚をたつとんだ好みである。町奴ごのみである。で、どこやら男性的で、少年の美——若衆だちといった顔や、眉や、眼のはりや、キビ／＼した、澆刺さをふくんで、いはゆる張りのある女であつた。

では、富裕の町人の娘たちはどうであつたかといへば、お姫さまより顔が美しかつたといへよう。おんなじやうな深窓の育ちではあるが、その人たちのおつくりには、上方づくりの濃艶さがあつた。芝居では、油屋お染とお半の扮装が代表である。大問屋、大町人はかみがた阪地に關係が深いので、店の制度も奥向きの方も、阪地の富豪とさう違つてはゐなかつた。

私はむしろ、山の手とよばれた武家の家族の中にも、凜とした

梅の花の、下町娘と共通のよさを感じる。山の手が野暮になつたのは明治維新に、諸國入亂れの士族さんのグループに占領されてからであらうと思ふ。質素な、白丈長をキリリと島田の根にまいた、紫矢がすりに黒じゆすの帶、べつここの櫛に銀の平打一枚、ひらうち小褌をキリリとあげた武家の娘のいさぎよさは實に清艶である。

下町娘でなければ、江戸の美をとどめないやうにいふのは半可通ではあるまいか。それと同時に、現今でも、下町にいつたら——もしくは、昔風の下町づくりをしてゐるから、もはんの下町娘だといふのはあやまつてゐる。下町娘は心意氣である。江戸生れの氣質を代表した名なのである、單におつくりそのものではない。だから——と、いふ、いま、江戸の下町娘をもとめるのなら、

日本中いたるところに見出し得られる。ことに、近代東京においてもかなりにある。斷髮<sup>ポップ</sup>の中にも、洋服の中にも、工場にも、裏長屋にも——ことに思想運動の婦人の中に、その面影を見いだす。ただ悲しいことに、過去の下町娘は氣凜において實にめざましいものをもつてゐたが、なんにも知らなすぎた、頭がからつぽだつた。

情熱の女にも、幾分の理智をもたさなければ現代に生きてゆけはしない。いま、もし、現代の下町娘を選べといへば、朝の學校通ひの娘の中に、工場に腕を出して働いてゐる娘の中に、明敏な瞳をひらき、胸をはつた、あんまり白粉つ氣のない娘を求めだすだらう。それが最も近代的な、そして力強い未來をたのむことの

出来る、代表的な東京娘である。

それから、くだけていへば下町娘は決して美人ではない、感覺的にも性的魅惑はもつてゐない。むしろ、そんなものが八ツ口からでもこぼれでたら恥づべきだと思つてゐるところがあつた。自然の色氣——それは避けないが、殊更に、女の匂ひを利用しようとはしなかつた。情にもろいこと、涙もろいこと——それが偽りつくものでないだけに缺點だともいへる。だから、女性をんなを食用かしわ鶏肉のやうにしか考へることを知らないあはれな男どもには、ちと筋がありすぎて——さうはいふが、娼婦性がすけないだけ、純なる彼女である、男思ひである。頭がないといったが無智なのではない。



生活共同戦線へたつときには、たのもしい連合である。

「サンデー」から私へ求めたのは、西鶴が街を通る美女を書きのこしたやうに、あたしの眼に残る下町娘のよさを、話のやうに書けといふのであつた。それはもとより、江戸時代から轉化してきた明治中期のでよいのであらうが、女の子の眼に残つたのは、中年の文豪の見た——着物などは通して見てしまった、個々の女の、肌のよさとは違ふ。

現いまの婦ひと人は、かなり個性に生きてゐるといふが、そのくせ流は行やりものに安くコビリつく。その點、古い下町の女はかなり自分

に生きてゐた。勿論あのヨボくの歌右衛門が、福助といふ人氣女形俳優であつたころ、なにかもが彼の紋ぢらしでなければ賣れなかつたといふこともあるにはあるが——とも角、美しい美しくないからいへば、當今ほどきれいな女は多くなかつた。目にもつかなくなつた。町は一たいに黒つぽかつた。

ふと、思ふと、下町娘の美より多く、わたしは年増の美の方が目に残つてゐる。年増の美は下町の粹だつたかともいへる。洗髪  
の凄艶なる姿——

本所に住む、角力の髪を結ふ職人があつた。その人が年をとつてからの思ひ出ばなしに、ある夕立の日、本所の裏町にすんでゐ

だが、外から駈けこんで、いきなりガラリと長屋の板戸をあけると、土間の薄暗がりには、すつとたつてゐた人影がある。アツといつて立ちすくむと、その人は笑ひながら出て来て、

「すまなかつたねえ」

といった。キモを落付けて見ると、抜けるやうな美女！

——抜けるやうなといふ譬をよく美女の場合にきいたが、一枚繪から抜けだしたといふのか、魂がぬけだしてきたといふのか、ともかくおもしろい言葉である——

白張傘しろはりをひらいて雨の中にその女が出てゆかうとする。外は溝板が浮いてるやうな大降りだ。ものどりでないことは、その女の風姿すがたと、自分の家の貧しさでも知れてゐるので、

「傘の中より洩りますが、しぶきがこないだけでもおしのぎになれませう。」

と止めた。さうはいつたが、自分は家の中にはいれなかつたほど、その女が<sup>ひと</sup>凄く美しかつたのだつた。黒い透屋の<sup>すきや</sup>着物、白はかたの帶、水色のえりうらが見えてゐたが、無論素足で――

「一ツ目の辨天様へおまゐりに來て――」

と女はまた笑つた。家の中を見廻して、歸る時に懷<sup>くわい</sup>紙にくるんで金をおいていつたが、あんな凄く綺麗な女はないと、彼は老年になつても繰りかへしてゐた。

下町の好みは、髪をザングリと油でかためずに、ものものしく

結ひあげない。櫛の齒も幾度もいれず、浴衣ゆかたの似合ふとりなりである。それだけに紋附きにはむかない。どうしても平民ごのみである。

着物が地味だから半襟と前かけの紐がきはだつた。朱塗りの櫛が効果のあるやうに、簪もあんまり大きいのは挿さない。いてふがへしの黒髪が、黒じゆすの着物の襟に流れていつて、秩父絹の裾裏の棲さきに走る。綺麗に洗つた足の指が、青竹色の吾妻下駄の鼻緒に揃つて、小砂利を軽く蹴かへす——肩には日傘、三ツ杵の白ぬき、または三ツ柏や瓢箪の染めてある稽古本入れのつばくろぐちをかかへてゐる。（つばくろぐちは稽古本を入れる袋）

いま隣室となりの「女人藝術」編輯室には、いつものみんなの外に珍

らしいお客さんたちも見えて、襖一重むかうでは、將來の女人としてのさま／＼な希望が机の上に、人の口に盛んである。そのとなりではかうして、一時代も二時代も前の、一地方的な、東京下町の娘のことをあたしは思ひ出さうとしてゐる。このあわただしい氣持ちで何が思ひだせよう。

——昭和四年十月・サンデー——

# 青空文庫情報

底本：「隨筆 きもの」實業之日本社

1939（昭和14）年10月20日発行

1939（昭和14）年11月7日5版

初出：「サンデー」

1929（昭和4）年10月

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2009年1月17日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 下町娘

長谷川時雨

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>